

人はなぜ迷うのか～ 眼球運動と経済的意思決定の関係



一橋大学 経済学研究科 准教授
竹内 幹

研究の背景

数ある商品の中から好きなモノを選ぶとき、人間はいったい何をしているのでしょうか。最近まで「実験」をすることのなかった経済学は、この問いに対して、数理的な意思決定モデルを構築することで理解を深めてきました。それに対し、実験経済学は、人間行動を観察しながら意思決定モデルを設計し、その妥当性を吟味します。私は、アイトラッキングという技術で人の視線（どこを見ているか）を計測して、意思決定をする過程のモデル化に取り組んでいます。視線と意思決定は密接にかかわっています（図1）。そこで私は、特に迷いながら見比べるプロセスに関心をもちました。正解がすぐにわからないときに人は迷うのですが、そもそも何のために迷うのでしょうか？

研究の成果

成果のひとつは、正解がある問題を解くときに、実験参加者が「見比べながら選択に至る」プロセスをモデル化できたことです（服部光氏との共同研究）。実験では、図2のように濃淡の異なる4つの四角形がPCモニターに表示されます。左側に表示された四角形のペアと右側のペアを比べ、左右どちらのペアが全体的に白いかを当ててもらいました。正解すれば追加謝金がもらえるようにします（図2では右が正解）。

左右の差が一目瞭然ではないので、何度も見比べて迷います。図2の黄色い丸印は、実験参加者の1人が4つの四角を1.5秒かけて見回した視線の軌跡です。6秒間の視線の推移を描いただけでも図3のように目まぐるしく見比べてい

る様子がわかります。現データでは、平均11.5秒かけて選び、その間に26.3回も視点を移していることがわかります。

本実験の独自な点は、選択肢に複数の属性（2つの四角の色）があることと、客観的な正解があることです。その正解を当てるために属性を統合する過程を設けることで、必ず迷いが生じます。見比べているうちに、左右どちらかを選ぶ「気持ち」が高まっていくと考えられるので、その気持ちを指標化し、視線データで左右の選択を説明します。予想通り、白い四角を見るほどそちらのペアを選びたくなり、黒い四角を見るほど反対側のペアを選びたくなるという気持ちの時間変化を再現できました。

今後の展望

今後は、モデルの精度を上げながら、迷いの過程をより明確に分析していきます。迷うこと自体はごく自然なことですが、それでも、なぜ私たちは迷わなければいけないのかについてもっと理論的な説明ができるはずです。そうすれば、錯誤を防いだり、人が陥りがちな選択のワナを避けたりより正確な判断ができるでしょう。

関連する科研費

平成22-24年度 若手研究 (B)「時間選好とリスク選好を統合した実験経済学的研究」

平成25-27年度 若手研究 (B)「眼球運動と経済的意思決定：アイトラッキングを使った実験研究」

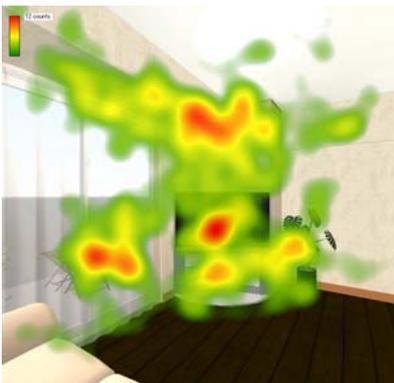


図1 モデルルーム内覧時の視点分布
赤い部分が頻繁に見ている場所で、人によって見る場所は異なり、感じ方も異なります。

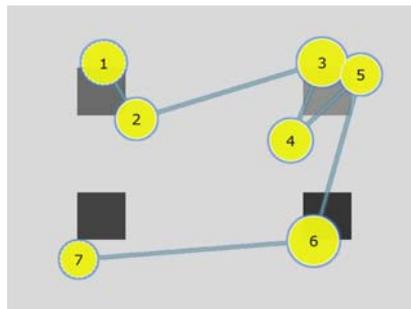


図2 1.5秒間の視線の推移

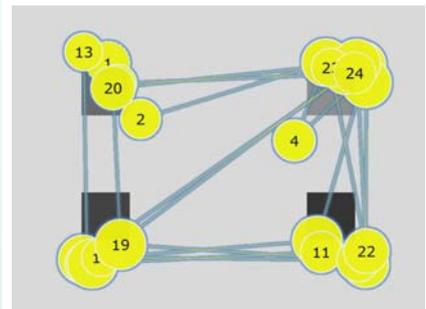


図3 6.0秒間の視線の推移